（３０年度）

評価項目	領域	中期目標	短期目標	取組・成果指標	評価基準		自己評価 達成状況	評価	学校関係者評価 考察	評価	改善策
①学習指導	確かな学力の育成	授業を中心とした、生徒の興味・関心・意欲が高まる、しかもわかる授業を展開する。支援・援助の必要とする授業内容では、TT指導や学習支援員の効果的な活用できめ細かな指導を目指す。また、授業教材研究に努め、授業活用プリントや資料の工夫、IT教育機器の積極的な活用を図り、生徒の自己学主力を高める手立てを行う。学力を高める上で、家庭学習課題や課題プリント・副教材の演習問題など積極的に提示し、実施の有無の確認や評価を必ず実施する。	生徒の興味・関心・意欲が高まる、わかる授業づくりに取り組む。TT指導や学習支援員の積極的な活用と授業教材やIT教育機器の有効活用を取り入れる。	最初に「めあて」を提示して授業に臨み、説明を聞く場面、思考する場面、表現や発表する場面を明確にし、生徒が授業で、思考・判断・表現する力の育成をする。授業の終わりでは「自己の振り返り」を行うことで、授業理解度や自己課題をはっきりさせ、家庭学習や次時の授業につなげていく。	A	教員の授業実践力が向上し、生徒の興味・関心・意欲を高め、わかる授業が展開されるとともに、学級全体が学習へ向かう態度が向上し、生徒の自己学習力が向上している。	昨年度に続き、授業のはじめに「学習のねらい」を提示し、授業の学習意欲を高め、終わりの「振り返り」をすることで、授業内容の理解度や授業参加などの自己評価を明確にさせ、江津中の授業スタイルの確立を図っていった。 わかる授業づくりを進める上では、綿密な教材研究、授業ワークシートや演習問題プリントの工夫と作成、副教材等の資料やIT機器の活用した授業展開を実践し、各教科間では、公開授業と授業研究を実施することで、教員の授業力向上を図った。また、積み重ねの教科や実技を伴う教科では、TT指導や学校支援員の活用を図り、生徒によりきめ細かな指導が行き届くように積極的に継続して授業実践してきた。 言語活動を充実させる思考力、判断力、表現力を育成するために、学習内容に応じて、言語活動場面を取り入れ、既習事項を基に自分の考えを持ち、ノート等に言葉で表現したり、ホワイトボードなどを使用して発表し合ったりすることで、深い理解へと理解へと導いていった。	A	分かりやすい授業をされていることが伺える。入念な事前準備をされ、その結果、生徒の学習に対する姿勢の向上が見られ、それが数字としても表れて来ていることに対して先生方の努力を大変評価する。理解力、集中力は個人差が大きく、すぐに成果が表れないので、用意周到な授業づくりで学力向上につなげるように今後も粘り強く続けていただきたい。 また生徒には、学習する意味やこれが将来に必ず役に立つという意識付けを徹底して行ってほしい。	A	全ての授業で、「学習のねらい」を明確に提示し、「振り返り」を大切に継続することで、学習理解及び意欲のさらなる向上を図る。 わかる授業を進める上で重要な教材研究に力を入れていき、授業展開・授業ワークシートの工夫・演習問題プリントの作成・発問のあり方・ホワイトボードやIT機器の有効な活用・T2及び支援員との連携などに力を入れていく。また、授業内容によって、言語活動を充実させる授業展開や授業形態を工夫し、生徒の「学ぶことの楽しさ」を高めていく。 「学び」を知識や技術の習得、学校教育だけといった偏った価値観に終わらないように、人間は文化的・経済的により豊かに生活するために、将来にわたりずっと学び続けることの重要性を強調し、キャリヤ教育も推進していく。
					B	工夫のあるわかる授業が展開され、聞く・考える・表現する場面では、生徒はそれに従って落ち着いて授業受けている。					
					C	授業への取組に個人差がみられ、集中力に欠ける生徒が見られる。					
					D	授業全体に落ち着きがなく、集中力に欠ける。					
			学力向上につながる家庭学習の充実を図るために、学校で作成した「学習の手引き」や各教科で出されている「家庭学習のあり方」をもとに、家庭学習への意識を高める。また、生徒が積極的に家庭学習が取り組めるように各学年および各教科で家庭学習課題の提示と確認・評価を継続する。	学力向上を図るための家庭学習の習慣化させる。 ①各教科の家庭学習課題提示 ②各学年の自学ノートの取組充実 ③定期・習熟度テストへの家庭学習取組表の実施 ④家庭学習調査を行い、毎日の平均120分以上を目標	A	各教科担任および各学年で家庭学習課題の提示と確認・評価を継続して行い、平日の家庭学習習慣が定着（120分超）	「学習の手引き」の活用方法の学級指導や、「学習の手引き」や「授業改善アクションプラン」に基づいた授業実践を継続して展開していった。 自学ノートの取組は、昨年度同様に全学年とも生徒に実施し提出させ、各学年部教員が毎日チェックや激励を行っている。未提出の生徒には、昼休みや放課後に実施させるなど、継続してすることの家庭学習の重要性を伝えていき、自学ノートの取組が家庭学習として習慣化してきた。 授業では学習効果を高めるために、次時の授業内容を授業終了時に提示し予習をうながしたり、授業内容の確実の定着のために、副教材の課題提示し確認したり、課題プリントを配布したりした。また、3学期の1月には、5教科において単元テストを設定し、家庭学習の習慣化と学力の充実を図ってきた。 このような継続した取組を通して、家庭学習時間調査を実施したところ、1年生では106分、2年生では93分、3年生では137分であった。受験の学年である3年生は、進路決定を意識した家庭学習時間が伸びており、1年生では、自学ノートの継続実施で家庭学習習慣の確立がうかがえる。その反面2年生では、昨年より家庭学習時間が減少している実情があり、中だるみの懸念がある。また、家庭学習を行う教科に関しては、英語や数学が多く、積み重ねの教科でもあり継続して学習する傾向が出てきた。国・社・理の家庭学習が少ないことから、各教科で家庭学習課題を提示していく必要がある。	B	家庭学習の時間が伸びており、指導の成果が表れつつあるようだ。全体に呼びかけるだけでは他人事として捉えられるので、個々への働きかけで、更なる定着を望む。 部活動等で家庭学習がどうしても少なくなってしまう学年もあるが、習慣化して行く為には家庭の力が大きいと思う。課題提示、自学ノート、家庭への呼びかけを継続してほしい。 毎年のことだが、中だるみになりがちな2年生の学習意欲の低さが数字に顕著に表れている。学習の意義や継続、積み重ねの大切さをきちんと教えていただきたい。	B	年度当初、新メンバーで「学習の手引き：新年度版」を作成し、学級指導をすることによって、授業や家庭での学習の基盤をさらに確立させていく。また、各教科で本校生徒の学習課題を明確にして、「授業アクションプラン」を策定し、授業実践を積み重ね、定期テストや全国及び県学力調査で検証する。 家庭学習時間は、県の平均時間より低いことが課題であることから、5教科を中心に毎時間授業の終りに家庭学習課題を提示、次時にその課題のチェックを確実にする。積み重ねの教科（数学・英語）は、週末課題を与え、また、部活動休養日の月曜日には計画的に家庭学習課題を提示し、実践させることで家庭学習の習慣化を図る。ただ、学習課題の未実施の生徒については、自学ノート同様、昼休みや放課後を使って、部活動よりも優先し未実施学習課題をさせる対応をとる。 家庭学習時間は、生徒のスマートフォンの所持率が上がるとともに、減少傾向が表れてきた。家庭でも、スマートホンの使用を野放しせず、家庭内の決まりを作り、過度な使用を防止させ、家庭学習を優先していただけるように、PTA総会・学年懇談・期末懇談や学校だより・学年通信を活用して、保護者への啓発を図る。 2年生での学習意欲の低さが毎年あがっている。新鮮さも薄くなり、中学校卒業後の進路もまだ先のことと考えがちな2年生は、この中だるみの傾向にあるが、高校入試制度も変わり、希望する高校で3年間やっていける学力が備わっていないと合格しないことを明確に生徒に伝え、進路希望の実現に向けて学習意欲を高めていく。
					B	家庭学習の提示と確認・評価を継続しているが、生徒の家庭学習時間にバラツキがありが、全体としては家庭学習が習慣化（90分以上）					
					C	家庭学習時間が不十分な生徒が多く、全体として家庭学習が停滞 （60分～90分未満）					
					D	家庭学習時間の重要性を意識せず、全体として家庭学習不足で、習慣化にはほど遠い。（60分未満）					

評価項目	領域	中期目標	短期目標	取組・成果指標	評価基準		自己評価 達成状況	評価	学校関係者評価 考察	評価	改善策
①学習指導	人権・同和教育の推進	一人一人が認められ、差別や偏見を許さない人権感覚と実践力を養い、いじめのない学校をつくる。	自他の人権を尊重し「差別をしない生き方」ができる力を育てるために、人権集会や人権講演会を通して生徒が考える場を設定する。	人の個性を認め、助け合いながら生活していくことについて考えるきっかけとなる場として、人権集会や人権講演会を実施する。	A B C D	人権集会や人権講演会を通して、生徒が個性を尊重した生き方について考える。 人権集会や人権講演会を計画的に実施。 人権集会や人権講演会の内容が生徒の実態と合わない。 人権集会や人権講演会が実施できない。	2学期に、日本盲導犬協会島根あさひ訓練センターパピネスの普及推進担当職員の方と盲導犬を招いて、人権集会を実施することができた。生徒会本部の生徒の進行で、生徒は職員の方の、「目がみえない、見えにくいとはどういうことか」「視覚障がい者や盲導犬と出会った時は、どのようなことに配慮すればいいか。」などの説明を聞いた。また、盲導犬とふれあったり、アイマスク歩行、手引きの方法などを実際に体験することができた。 盲導犬と一緒に活動することで、自然に目の見えない人の不自由さを感じることができた生徒が多く、生徒の感想にもその内容が多く書かれていた。また、白杖を持っている人や盲導犬と一緒にいる人と出会ったら、手伝いをしたいとか、困っておられたら進んで声をかけたいと書いている生徒もいた。 さまざまな立場の人がいることに気づき、お互いを思いやりながら生活することの意味について考えるきっかけになったと思われる。	B	盲導犬協会の方を招いての人権集会では、生徒たちは社会的弱者の方への思いやりや共生の大切さを学ぶ良い機会となったのではないか。大変有意義な時間であったと思う。ここで得られた気づきは生徒の心にいつまでも残っていると思う。相手の立場に立って行動出来る生徒が増えるように願う。これを学校内でのいじめや差別問題へも良い波及効果が生まれればよいと思う。今後も生徒たちの人権意識を向上させるような機会を増やしてほしい。	B	人権集会などの自他の尊重について考える機会を設定すると、生徒は一生懸命考えたり、自分の行動について振り返ったりしていた。生徒の実態に即し、人権集会を計画的に実施していく必要がある。今年度は2学期に1回の実施だったが、来年度は回数を増やしたい。また、人権集会等の実施に併せ、平素から人権意識を高めるような指導を計画的に行っていく必要がある。 自他の尊重は、引き続きのテーマになっていくと思われる。生徒の日々の生活に根ざした、繰り返しの指導も大切にしていきたい。
①学習指導	学校図書館・読書活動の推進	多様な価値観に触れ、表現力や想像力を育む読書活動を推進する。	朝読書を継続して行い、学校図書館利用増を目指しての読書推進活動を充実する。	「利用しやすい図書館」として、昨年以上に図書館の利用者が増加し、家庭での家読の習慣化を図る。教科学習においての図書館利用にも一層の活用を推進していく。読書ノートの活用を継続することで、充実した読書記録とする。また、新聞を活用して、幅広い情報活用に取り組む。	A B C D	図書館利用が増加し、家読が定着（家読30分以上） 図書館利用が増加し、家読が習慣化（家読10～20分） 図書館利用が増加したが、家読が不十分（10分未満） 図書館利用が増加せず、家読も不十分（10分未満）	図書の貸し出し状況を含む図書館の利用状況は、例年同様充実している。ただし、2年生の貸し出し冊数が前年より減少している。それに伴って、全体の貸し出し冊数も3割程度減少している。図書館の利用に関しては、購入図書の選書に各教科担当の希望を積極的に取り入れることや、生徒のリクエストを定期的に行うことで、生徒が興味関心を持ち、授業でも活用しやすい環境を整えるよう工夫をしてきた。さらに、図書館だよりや委員会活動での情報提供、季節や行事ごとのレイアウトの工夫も継続している。今回の減少が、直接読書の時間や取組に大きな影響は与えていない。個人の図書を使っての読書の傾向が例年以上に高かったのが一因と思われるが、さらに魅力のある、利用しやすい図書館にしていくために、継続した活動を行っていきたい。 家読については、今年度も学校として呼びかけを継続している。家庭での読書のきっかけづくりとしての読書ノートの活用も定着しており、読書の記録を実施することが、家での読書を後押ししていると思われる。ただし、全体の3割強の生徒が、ほとんど家庭での読書をしないという回答をしており、ほぼ毎日、もしくは週に2、3日という生徒の数と同数となっている。学年が上がるにつれ、数も減少の傾向を示しており、時間の確保という点で、課題が残る。家庭での読書はほとんどが一人での読書となっている。家庭の中での読書環境づくりに、家族の意識が大きくかかわると思われるので、今後は、定期的な家読週間を設けたり、実践事例の研究などを通して、啓発に努めていきたい。	B	我が子が中学生の時、家で本を読んでいる姿は殆ど見たことが無かったので感心している。読む本の分野を広げたり、文章のレベルも少しづつ上げて欲しい。読書を通して得られる集中力、表現力等を生徒たちが理解しているのかどうか不明な点があるように思う。読書による効能をもっとアピールし続けていただきたい。 昨今、書店減少傾向が加速化しており、この地域でも気軽に書店に立ち寄り、本に触れるという機会が困難になっている現状から、図書館の持つ役割は非常に重要なものと考える。生徒たちのニーズも踏まえつつ、生徒に有益になる選書を行ってほしい。家読は読書ノートの活用などここ数年の取り組みによって徐々に定着してきたことは喜ばしい。継続した取り組みの成果である。引き続き取り組んでいってほしい。家庭内の読書環境を促進していくためにも小中連携での家読週間の導入はぜひ実践してほしい。	B	最近の傾向として自分の好きな本は読むが、幅広い分野の選書には消極的という生徒が増えた。読書時間は十分だが、内容については十分かどうか検証していきたい。学校図書館の蔵書の積極的な活用と読書生活のより効果的な取組について方法を検討していく必要がある。 家読については、家庭での読書がほとんどないという生徒が3割に達する現状を踏まえて、「家読週間」の導入は効果的であると思える。小中との連携も念頭に置きながら実施に向けて取り組んでいきたい。 読書ノートの活用は今後も継続していく。
①学習指導	言語活動の充実	授業の中で積極的に「言語活動の充実」の視点からの取組を行い、生徒の思考力、表現力、判断力を向上させる。	各教科等で、思考力、表現力、判断力を高める手立てを行う。	全教科の授業で工夫を凝らした思考力、表現力を高める活動を実施する。「話合い活動の基本型」をつくり、各教科である程度統一した指導をし、生徒のグループ討議のスキルを向上させる。今年度は全教員が言語活動を取り入れた授業を公開し、互いに研修を深める。また、試験問題（評価方法）にもより一層の工夫を講じる。	A B C D	全教科で表現活動を実施し、思考力・判断力・表現力が向上 各教科で工夫した表現活動を実施 ほとんどの教科で表現活動を実施 表現活動が不十分で、表現力が高まらず	今年度も授業改善の柱を、「自分の考えを表現する力を育成する～根拠をもとに、自分の考えを説明する場面づくり～」とし、昨年度の実践を基に全教科でさらに工夫を重ねた。特に、「どのように言えば相手に自分の意見が伝わりやすいか」を例示した「話し合い活動の基本型」をつくり、生徒が必要な時にいつでも利用できるようにした。 その結果、1・2年生の県学力調査で平均正答率を比較すると、「思考・判断・表現力を問う設問」に対しては、英語で1年生が県平均より8.9ポイント上回り、2年生が0.4ポイント下回った。理科で1年生が、3.0ポイント市平均より上回り、2年生が3.4ポイント上回った。社会で1年生が市平均より4.9ポイント上回り、2年生で1.9ポイント上回った。記述式の設問に対しては国語が1年生で県平均より3.0ポイント上回り、2年生が1.0ポイント下回った。数学が1年生では、県平均より4.7ポイント上回り、2年生では2.4ポイント上回った。教科によって差はあるものの、ほぼ市や県平均よりも上回っている。さらに「話し合い活動の基本形」等を活用し、言語活動を取り入れた授業を工夫して思考力・表現力・判断力を育成していきたい。	B	「話し合い活動の基本形」の作成・導入が、生徒たちの「思考力、判断力、表現力」の向上への一助になっていることは喜ばしい。自分の考えや意思をはっきり相手に伝えられるようになることは、社会を生きて行く上での必須アイテムなので、引き続き指導をお願いしたい。また相手の意見を十分理解し、その意見を尊重する姿勢も養っていただきたい。 表現力も大切だが、基本となるのは読解力と聴く力だと思う。聴いて理解し、読んで理解し、理解したことを頭の中に蓄積していくことが大切だと思う。具体的な取り組みが生徒の意識向上、学力向上に着実につながっていると思うので、引き続きお願いしたい。	B	来年度も、「自分の考えを表現する力を養成する」～根拠をもとに自分の考えを説明する場面づくり～を授業改善の柱とし、より多くの場面で表現力を鍛える場面をつくっていきたい。また、「思考力・判断力」の育成のために、意見交換を通して多くの考えにふれ、そこから自分の意見をまとめる等の授業展開の工夫を継続していきたい。 また、生徒の学習規律の指導が、「聴く力」の向上に役立っていると考える。よって、生徒指導部とも連携し、生徒が落ち着いて学べる環境を整えていきたい。 さらに、表現力を支える「基礎知識」の習得についても、各教科や家庭学習の方法等で工夫をしていく。

評価項目	領域	中期目標	短期目標	取組・成果指標	評価基準		自己評価 達成状況	評価	学校関係者評価 考察	評価	改善策
②ふるさと・キャリア教育	ふるさと・キャリア教育の推進	キャリア教育の体制を整えるとともに、将来に生きる大きな夢や希望を育む。「江津の明日を創る人」を育てるために、ふるさと郷土・地域に根ざした各種体験活動を核とした取組を推進する。	地域の教育資源（ひと・もの・こと）を有効に活用し、各学年で系統立ったふるさと・キャリア教育を推進する。	各学年で取り組む、本町探訪、修学旅行の企業訪問、事業所訪問、福祉学習、上級学校調べ、職場体験等の活動が系統的に、より一層充実するように努める。また、地域の「ひと・もの・こと」を活用することで、地域の魅力や課題の理解を進める。	A B C D	ふるさと・キャリア教育を計画的に実施し、意識が向上 全学年、充実したふるさと・キャリア教育を実施 ふるさと・キャリア教育を計画的に実施 ふるさと・キャリア教育を計画的に実施できず	恒例の5月「ふるさと探訪」では、各学年ごとに地域の貴重な教育資源である「もの・ひと・こと」を活用した活動を行った。1年生は、本町地区歴史的建造物をいかした町づくりについて、郷田まちづくり交流センター長さんや、まちづくり推進協議会副会長さんから話を聴いたり、食生活改善推進委員会の方との調理実習や市役所都市計画課・更生保護女性会・まちづくり推進会の方とともに環境整備活動を行った。午後からは、グループ毎に指令書を元にウォークラリーを行い、地域の方から各ポイント地点の由来や説明などを聴く活動を行った。 2年生は、市の出前講座を利用して、万葉の歌碑巡りを行う予定にしていたが、悪天候のため屋内での活動に変更となった。 3年生は、松平地域防災拠点施設を中心に、田植え活動や調理活動を行い、ふるさとへの関心・愛情を深めることができた。また、秋に1年生はふるさと学習フィールドワークとして、石州瓦、石見焼、江の川祭、ビジネスプランコンテスト、まちづくり、江津の歴史の6つの活動の中から希望を取り、地域へ出かけ活動をしておられる人に様々な話を聞く学習と、世界的やシェアを誇る地元の企業を訪問することをとおして、ふるさと江津の企業についての認識を深め、良さを学ぶ学習を行った。地域の様々な方の力をお借りし、指導を受けながら貴重な体験を行うことで、生徒は江津にある歴史や文化、さらに現状について関心をもつことができた。 キャリア教育では例年通り1年生は職業調べ、2年生は上級学校調べ、3年では職場体験学習を行った。このキャリア教育と並行して、ふるさと教育を進めることで、将来江津で働きたいと思う生徒を増やすことにつなげていきたい。	A	ふるさと教育については毎年色々な企画を進めていて、工夫が感じられる。今後もぜひ続けていただきたい。生徒が地域の方と触れ合える有意義な活動だと思うので、出来る限り地域の住民としても協力していきたい。 地域との連携でいうと、校区内各地区の地域コミュニティ組織が行っている事業に中学生たちも積極的に参加して、若者の視点から地域の課題や将来に向けての提案などを示してほしい。生徒たちがふるさとを愛し、この地域を支えていくという自覚を持つきっかけづくりになると思う。また本年度も地域の優れた人材を講師に迎え、授業を行ったことは生徒の刺激になったと思う。引き続き取り組んでいってほしい。キャリア教育については、ここ数年取り組んでいる言語活動推進や規範意識の指導により江中の生徒たちが職場体験の事業所の方から好印象を持たれていると聞く。引き続きご指導していただきたい。	A	ふるさと教育については、各学年取り組む内容がここ数年でずいぶん定着してきた。地域の優れた人材を講師に迎えて授業を行うスタイルは今後も続けていく。昨年度より行っている地元の工業団地訪問などは、訪問先や内容を少しずつ広げていくなどして充実させていきたい。 例年行っている「5月のふるさと探訪」は来年度は10連休のため、実施が困難である。来年度については授業時数確保のため実施についてはやり方を工夫するなど検討が必要である。 地域コミュニティ交流センター等で行っている事業については、学校が情報をもらい、生徒が参加できるようであれば機会を設けるようにしたい。 キャリア教育は、職場体験を中心に働くことの意義だけでなく、人としての接し方や礼法等についても、引き続き指導をしていく。
③生徒指導	生徒指導の充実	教職員の共通理解・協力体制により、社会規範を遵守する態度を育成する。	躾教育を核とした生活習慣の定着とふるまい向上のため、生徒会と連携しながら指導を行う。	生徒会と連携したふるまい向上等を推進し、生徒の基本的生活習慣、規範意識が向上する。 情報モラルについては、家庭への情報提供し、特に「家庭内の約束」の遵守をめざす。	A B C D	生活習慣、規範意識が向上し、ネットトラブル等が起きない 生活習慣、規範意識が向上 生活習慣、規範意識が向上せず 生活習慣、規範意識が下降	挨拶、返事、靴揃えを基本とし、年間を通じあらゆる機会で繰り返し指導を行った。挨拶の声はまだ十分とは言えないが、靴揃えは多くの生徒が意識して整えるようになり、良き伝統として誇れるようになってきた。また、身だしなみについてもきちんと整えて生活し、落ち着いた学校生活を送ることができた。地域の方からも生徒の行動についてお褒めの言葉をいただく機会も何度かあった。 不要物の持ち込みや反社会的な行動はなく、一人一人が規範意識を持って生活することができていた。 ネットトラブルについては、1・2学期に数件発生した。一時的な感情で発信したことで、不快な思いをした生徒がおり、家庭と連携しながら指導を行った。外部の専門家を招き、学期に1回情報モラルについての講演を実施し、全校に対してもモラルの向上を図った。また、PTA総会や地区懇談会、期末懇談会などの機会を通じ、保護者に対しても啓発を行った。しかし、家庭内の約束がだんだんと形骸化し、利用時間が守られないなど保護者の意識はあまり高まっていないようである。	B	「挨拶」「返事」靴揃え」は学校側の徹底した指導によりできるようになった。街中で出会っても不快に感じられるような態度の生徒はおらず、総じてまじめにやっていると思う。気持ちの良い挨拶が返ってくるとお互いにいい気分になる。 しかし生活習慣を身につけるのは基本的には家庭がやるべきで学校がやるべきことだとは思わない。家庭や地域のモラル低下の現状が心配である。 継続的に行っている情報モラルの取り組みだが、年々形骸化してきているように感じる。急速に進む情報機器の進歩や子どもたちを取り巻く情報化社会の荒波に学校側の対応も後手に回っている現状は深刻である。小中学校へのスマホ持ち込みの議論が出始めているが、学校への持ち込みは必要ないと考える。ネット依存による学力低下を心配している。ネットトラブルは増加する傾向にあると思う。家庭でも約束をさせる親、守る生徒になってほしい。	B	本校では、「挨拶」「返事」「靴揃え」を継続して指導を行ってきており、伝統化してきている。ただ、できているからよしとするのではなく、生徒たちがこうしたことの良さを実感できる指導を行い、自発的に行動できる機運を育てたい。また、学校を離れた場でも変わらずに行動できるよう、部活動や宿泊体験など様々な機会を通して指導を行っていきたい。 情報機器の扱いについては、保護者の意識が大きく反映する。今後もPTAとの連携を行いながら、情報機器の取り扱いや情報モラルについてルール作りを進めていきたい。

評価項目	領域	中期目標	短期目標	取組・成果指標	評価基準		自己評価 達成状況	評価	学校関係者評価 考察	評価	改善策
④健康の増進・体力の向上	学校保健及び食育の推進	学校保健計画に基づいて、生徒の自己健康管理力の向上を図る。また、「食」に関する正しい知識と望ましい食習慣を身につけさせる。	疾病予防等の指導や「食」に関する指導を通して、自己管理力の向上と健やかで逞しい心身の育成に努める。	生徒一人一人、自分の健康に配慮した生活習慣や食習慣が定着する。幼小及び家庭との連携により、健康に関する自己管理の意識が向上する。特に全校生徒の朝食摂取率を100%とするための朝Goはんウィークの取組を充実する。校区の小学校と連携をとって実施できるよう進めていく。	A	積極的な健康管理により、健康に配慮した生活が定着 生徒の朝食摂取率が継続して100%となる	今年度は、生徒保健委員会の活動の一環として、1学期に「生活リズム点検調査(2回)」、2学期に「朝Go飯ウィーク」を実施した。これらの結果は学校保健委員会で報告した。 「生活リズム点検調査」は、「睡眠」「メディア接触」「朝食」「歯みがき」「排便」の項目で調査を行った。どの項目を見ても、改善の余地のある状況ではあったが、こうした調査を行うことで生徒自身が自分の生活を振り返り、見直すことに繋がることが期待できる。朝食摂取については、例年と同じような結果(90%前後)であった。そこで、2学期に「朝Go飯ウィーク」を実施することとし、その実施に向けて、栄養教諭による生徒への栄養指導を行った。また文化祭の保健委員会の展示物で朝ご飯の効果について知らせたり、簡単にな朝ご飯のレシピを紹介するなどして、生徒の知識を高めると共に、朝ご飯摂取への意欲を高めていくような活動を行った。また、今年度は校区の小学校とも協力し、校区で同じ時期に「朝Go飯ウィーク」を実施することで、家庭の協力をえられやすいようにした。 その結果、「朝Go飯ウィーク」期間中の朝食摂取率は男子95.9%、女子92.5%まで高まった。朝食未摂取の理由の中には、「家庭で用意されてない」「食べるものがない」という生徒自身の力では解決しがたい問題もあり、100%の達成は難しい状況があることも見えてきている。今後も引き続き生徒への啓発と同時に、保護者への啓発が肝要と思われる。	B	これまでの継続的な指導で朝ご飯の重要さが家庭に浸透してきているように思う。内容よりも「とにかく何か食べる」という習慣をつけることも大事なのではないかと思う。アンケート、レシピ紹介、文化祭での展示等生徒の知識を高める良い取り組みだと思う。家庭科の中の調理実習はより良い効果につながると思う。 また、生活リズム点検調査を実施したことは、生徒たちの自らの生活習慣を改める良いきっかけになると思うので良い試みである。PTAも一緒になって取り組み、心身ともに成長期の生徒たちが健康的な生活が送れるように切に願う。様々な食育の取り組みにより、食の大切さの意識を植え付けられたのは良い傾向である。ただこの件に関しては家庭との連携・啓発が欠かせない。 朝食未摂取の理由で「家庭で用意されてない」「食べるものが無い」という回答に驚いた。ぜひとも保護者への啓発をお願いしたい。	B	今年度までのところで、朝ご飯の重要性について生徒の認識は高まりつつあり、これを行動化していくための手立てとして、栄養教諭と連携した指導を計画したり、年に一度は朝ご飯について意識を向ける活動を計画したりしていきたい。校区の小学校との連携は今後も続け、兄弟姉妹、家族での取組となるよう工夫していきたい。 保護者への啓発については、PTAの役員の方々にも相談させていただき、啓発を進めていけるよう考えていきたい。
					B	自己の健康管理により、健康に配慮した生活が習慣化					
					C	自己の健康管理に努力					
					D	健康管理が不十分					
	体力の向上	体力向上に係る体育的活動の推進に努め、生涯に渡る健康なライフスタイルづくりを推進する。	運動の合理的で豊かなな実践を通して、運動の楽しさや喜びを味わうことができるようにする。	健康なライフスタイルを確立するため、家庭での健康・体力づくりを行う。 体育の授業に於いて保健分野からの指導など授業改善に努めていく。 長期休業前に、体力づくりの啓発を行い、家庭との連携を図る。	A	目標を立て計画的に健康・体力づくりを実践	夏季休業前に呼びかけを行い、記録用紙に結果を記入させた結果、男女ともに平均で20分程度の運動を行っている結果が出た。週に5回毎日1時間程度行う生徒もいれば、毎日20分程度の運動を行う生徒もおり、自発的に運動に取り組む生徒が増えた。その一方で、週何回と回数を決めずに行っている生徒や、1日1時間やっている日もあれば一週間何もしない日がある生徒もおり、生徒によって意識にばらつきがあることがわかった。そこで、2学期の保健体育の時間に、運動の意義や必要性について学習し、家庭でもできるトレーニングを紹介したり、実際に授業の中で運動を組み合わせるサーキットトレーニングなどを行ったりして、運動の選択肢を増やすことができるようにした。また、運動時間や頻度について自分にあったものを選ぶ時間を設定し、それぞれが実現可能な運動について考えた。その結果、冬休みは、ほとんどの生徒が計画的に運動を行い、運動の内容もそれぞれが自分に合った運動を選択することができていた。今後も継続して、啓発を行い、家庭と連携して体力づくりを中心とする健康なライフスタイルの確立に努めていきたい。	B	ここ数年の継続した取り組みで段々と定着して来たことは大変喜ばしい。なぜ運動をしなければならないのかを体育の授業等で生徒に気づかせることによって、自発的にする子も増えてきた。この取り組みのねらいを保護者にも十分理解してもらい、家庭内でも親子で一緒に楽しみながら体力づくりを行えるような活動も望む。 体力・運動能力などには個人差もあるので、生徒の能力に応じての体力作り(運動)が出来るようにしてほしい。	B	今年度までのところで、体力向上の取り組みが定着してきつつあるため、継続するための手立てとして、授業での啓発を続けていく。また、長期休業に入る前に保護者への啓発も行っていきたい。さらに、保護者と生徒が一緒に取り組める体力づくりを考えていきたい。 4月に行われるスポーツテストの結果をもとに、個々の能力に応じたトレーニングを選択できるような授業展開も考えていきたい。
					B	計画的に健康・体力づくりを実践(10分以上)					
					C	家庭で健康・体力づくりを実践					
					D	家庭での健康・体力づくりが不十分(5分未満)					

評価項目	領域	中期目標	短期目標	取組・成果指標	評価基準		自己評価 達成状況	評価	学校関係者評価 考察	評価	改善策
⑤安全管理・指導	学校安全の推進 安全対応能力の向上	安全で安心な危機管理体制の確立に努める。	危機管理マニュアルの改善とともに、毎月安全点検を実施し危険箇所の修理等を迅速に行う。	危機管理マニュアルの見直しと、毎月15日の安全点検実施に伴い、点検・修繕・修理を迅速に行う。 食物アレルギー対応委員会を組織し、実態と対応を把握する。	A	マニュアル改善、点検・修繕等を迅速に実施し、安全推進	築10年になる校舎は、あらゆる所で破損・故障が見られるようになり、毎月定期的に実施している安全点検はもちろんのこと、日々の生活の中で情報交換を密にし、点検・修繕に努めた。今年度は雨水再利用システムが故障し、トイレの水が流れないという状況になったが、迅速に対応し長期化することなく修繕できた。塩害によるエアコン室外機の交換や戸のスムースな開閉については、教育委員会も改善に向けて動いているが、多大な費用がかかるため先行き不透明なところがある。 危機管理では、校内での情報共有を確実にして食物アレルギー対応はできた。養護教諭を中心に新入生に関しても面談の時間を設けて、丁寧に対応するなど安心安全な体制の構築に努めた。 昨年度の反省を基に、学校事故・いじめ・差別事象・問題行動等の危機管理マニュアルの見直しについては推進することはできなかったが、熱中症対策については養護教諭を中心にして対応の推進を行っており、今後はマニュアル化していく方針である。	B	建物の老朽化に伴う事故の無いように点検をしっかりしてほしい。 食物アレルギーは命にもかかわる案件なので、アレルギーを持つ生徒たち一人一人に丁寧に対応できたことは大変評価する。情報を早期に把握し、保護者や小学校とも連携し、よりきめ細かな対応を望む。 又、日常生活の中で生徒の様子をしっかり観察していただき、いじめ等を早期に見つけて対処していただきたい。	B	様々な所で破損や故障が増えてきていることから、毎月15日に行う安全点検をより丁寧に行うようにする。市教委にも状況を伝え、危険な所は早期解決ができるようにする。 食物アレルギーについては、4月入学予定の生徒の保護者と面談を行いきめ細かい対応を行った。 いじめの対応については、各学級のアンケートのほか、教育相談等も行い、生徒の些細な変化を見逃さないようにしている。アンケートについては市教委にも点検をしてもらうなど、学校だけでなく多くの目で支援をする体制を今後も続けていく。
					B	マニュアルの改善、点検・修繕等を迅速に実施					
					C	点検がきちんとでき、必要に応じ修繕・修理					
					D	点検はきちんとできたが、修繕・修理が不十分					
		安全意識を高め、危機回避能力、危機対応能力の向上を目指す。	学校事故、交通事故や薬物乱用等の防止教育を徹底する。	危機回避力習得のための講話、実習等で、生徒の安全意識の向上を図る。特に、自転車通学生の交通マナーを遵守させる。消防署等と連携した計画的な避難訓練を実施する。	A	危機回避の講話、実習等の実施で安全意識が向上	例年1学期に交通事故が多発するため、今年度は入学前の新入生説明会でも自転車の乗り方について指導を行うとともに、事前に練習を行うよう呼びかけを行った。また、入学直後に警察の方を招き、講話を行うとともに、学校周辺での乗車練習を行った。その成果もあってか、登下校時の交通事故(自動車との接触)はゼロであった。また、転倒による怪我も例年よりも少なかった。 地区懇談会で保護者に協力してもらい、各地区ごとに安全マップを作成した。保護者も地域の安全について意識を高めるとともに、作成したマップを中央階段に掲示し、全校生徒にも危険個所などを示すことができた。 秋には自転車協会の方に自転車点検をしてもらい、整備不良車の整備を行った。 交通マナーについて、まだ並進や見えないところでのノーヘルがあるなど、まだ完全とは言えない点もあるため引き続き安全指導を行っていきたい。 避難訓練については、1学期は火災を想定した訓練、2学期は地震を想定した訓練を行った。消防署から指導に来てもらい、避難の様子についての指導や消火器を用いた消火訓練を行った。多くの生徒が真剣に取り組み、良好な避難態度であった。 薬物乱用防止については、保健体育の授業で扱うとともに、3年生については3学期にライオンズクラブの方から講話をしていただく予定である。	A	自転車による大きな事故がなかったことはまず一安心である。毎年自転車のマナー向上の指導をされているが、学校を離れた場所や休日などで、並進や一時停止無視など危険な運転をしている生徒も少なからず見かける。自転車は凶器にもなりうる乗り物だという自覚を持つように、より厳しい指導を望む。またPTAで通学路の危険マップを作成し周知を図ったが、地域や関係各所にも情報を共有して、改善可能な場所は改善するよう要望をしていくのが望ましい。 避難訓練の重要性は、災害時において熱心に取り組んでいるところほど被害が少なかったという事実が証明されており、より真剣に取り組む必要性を感じる。薬物乱用防止教育に含めて、飲酒や喫煙が健康に及ぼす影響も指導していってはどうか。 命の大切さを常に忘れない生徒指導を続けてほしい。自然災害への対処法の学習を併せてお願いしたい。	B	校外生活については、学校だけで指導を行うのではなく、家庭や地域との連携が欠かせない。通信や連絡メールのさらなる活用などをし、情報発信に努めたい。また、危険個所については、市教委や警察など関係機関にも連絡をし、改善を図りたい。 防災や、薬物乱用防止教育をはじめ健康教育については、保健体育や学級活動などの授業でも扱っており、授業と専門家による講演との両輪で指導を行っている。今後も、こうしたスパイラルな指導を継続していきたい。
					B	危機回避の講話、実習等を実施					
					C	危機回避の講話、実習等を一部実施					
					D	危機回避のための講話、実習が不十分					

評価項目	領域	中期目標	短期目標	取組・成果指標	評価基準		自己評価 達成状況	評価	学校関係者評価 考察	評価	改善策
⑥特別支援教育	校内・個別支援体制の充実	特別支援教育の校内体制を整備し、個別の教育ニーズに対応した指導・支援を充実する。	個別の指導計画及び個別の教育支援計画により、支援を充実する。また、実態に応じた進路保障の充実を図る。	特別支援教育コーディネーターを中心にして、個別の指導計画や個別の教育支援計画に基づいた指導・支援が充実する。	A B C D	具体的な教育支援計画を作成し、支援の充実で効果大 具体的な教育支援計画を作成し、支援が充実 具体的な教育支援計画を作成し、一部で支援 個別の教育支援計画に基づいた支援が不十分	各学年部教員や保護者と連携して生徒の実態を把握しながら、個別の指導計画及び個別の教育支援計画を作成した。今年度も生徒の状況の変化による必要感から、各学年部と相談して年度途中から作成したケースもあった。 3年生については、進路希望校以外の高等学校や特別支援学校等、複数の上級学校の見学や体験を勧めることで、進路に対する視野を広げ、学校の特色や校風を理解し、より良い進路選択ができるように支援した。また、他の学年についても、生徒の実態に応じて、学級担任や学年主任等と共に進路相談の場を設定し、生徒・保護者へ進路についての情報提供や上級学校の見学等を実施した。根気強く支援を続けることで、生徒の将来の生活に対する意識を高めることにつながっている。	B	特別支援学級はこの先需要も高まり内容を充実させることが益々求められると思う。全教員共通理解のもと力を入れていただきたい。 様々なケースの支援を必要とする生徒一人ひとりに対して、それぞれ個別の支援計画を臨機応変に作成し実施しておられることは大変評価できる。今後も保護者とも連携を密にしながら、個々の生徒の将来のために計画的で教職員一丸となった支援を続けていっていただきたい。また小学校や高等学校との情報交換を密にして、今後すべての子供たちが充実した実りある学校生活を送れるように、連携の取れた体制作りを期待する。	A	来年度も、支援を必要とする生徒について、全教職員の共通理解のもと、保護者と協力しながら実態を把握し個別の指導計画及び個別の教育支援計画を作成する。 支援を継続しながら、より有効な指導の手だてを検討し、さらに支援を充実させていきたい。 新入生については小学校で作成された支援計画を参考にし、卒業生については、進路先でも安心して充実した生活を送ることができるように、進路先へ引き継ぎをしっかりしていきたい。
	関係機関との連携、他校との交流の推進	教育、医療、福祉等の関係機関との連携を深め、積極的な情報交換を行う。	医療、福祉等関係機関、近隣の特別支援学校との連携を強化する。	関係機関、近隣の特別支援学校との連絡体制を整え、積極的に連携を図る。	A B C D	積極的に連携を行い、支援が充実 積極的に連携を推進 連携は不十分だが、連絡体制は整備 連携、連絡とも不十分	通級指導教室や市教育支援センター（あおぞら学園）等と定期的に連絡を取り合いながら、生徒の状況や実態把握に努めた。特別支援学校のセンター機能も活用し、生徒の実態把握や学習指導、進路指導等について相談しながら支援を進めた。また、医療機関の受診の際に教員が付き添うことで、Dr. に学校や家庭での生徒本人の困り感や様子等を伝えて、意見交換しながら支援の方針について考えた。生徒については不登校の状態が続いており、教育センターや児童相談所等に相談をかけても、それが続かないケースもあるが、今後も関係機関との連携を強化していきたい。	B	他の機関との連携はここ数年しっかりとできている。評価したい。特に医療機関への教師の付き添いによって的確に生徒本人の状況を医師と意見交換ができ、支援体制がうまく取れたことは生徒本人やご家族にとって非常に良かったと思う。その体制を今後も続けていってほしい。関係各所や他校との連携をより一層密にして、生徒の将来のために頑張っていただきたい。 生徒が楽しい学校生活が送れるように家庭とも連携を密にして支援してほしい。	A	来年度も、通級指導教室や市教育支援センター（あおぞら学園）等の関係機関と積極的に連携して、支援の方向性を考えていきたい。生徒の実態や状況を正しく把握し最適な支援を進めていくために、医療機関の受診に教員が付き添い、学校や家庭での様子を伝えることも、可能な限り続けていきたい。
⑦研修	校内研修の推進	校内での研修を計画的に行い、授業力の向上に努める。そして、確かな学力を身につけ、主体的に学ぶ生徒を育成する。	校内研修の充実により、授業力の向上をめざし、研究主題の達成に努める。	校内研修推進計画を立て、公開授業や研究協議などの校内研修会を計画的に行い、授業力の向上を目指す。また、授業改善アクションプランを実行し、成果をあげる。新指導要領のもとでの道徳教育について、研修と公開授業を通して学び、来年度の完全実施にむけて準備をすすめる。	A B C D	綿密な校内研修等により授業力が向上し、研究主題が達成。 綿密な校内研修を定期的に実施 校内研修を実施 校内研修を一部実施	年度当初に研究主題とそこに迫るための取組、および今年度の授業改善アクションプランの共通理解をし、全教科で「自分の考えを表現する力を育成する」ための授業展開を工夫した。県学力調査の「授業では、学級やグループの中で課題を立てて、その解決に向けて情報を集め、話し合いながら整理して、発表するなどの学習活動に取り組んでいると思う」の肯定的意見を持つ生徒の割合の1・2・3学年の平均が64.9%となっており、昨年度より約5ポイント下回っている。各学年の特性として、グループ学習が学習の効果があがる場合とそうでない場合とがあると考えられれる。今後、学習規律をしっかりと指導して、生徒の実態に合わせてグループ活動を学習に効果的に取り入れていきたい。 特に今年度は来年度より新学習指導要領による完全実施となる「特別の教科　道徳」について出前講座で学ぶともに、教育事務所の訪問指導で研究授業をもとに授業展開を中心に研修を深め、学年部ごとに指導案から検討した研究授業も行い、日々の実践に活かすことができた。また、道徳の評価方法と通知票等への記載方法については、訪問指導の講義を参考に道徳教育推進教師と研究部で検討中である。 授業担当者で年1回は公開授業をし、互いに授業を見合い、振り返りをすることで、互いの良い点は取り入れ、課題について改善策を考えるなど教員間で切磋琢磨を繰り返し、生徒の学力向上に役立てることができた。	B	忙しい中、研修の時間を確保されることは大変だと思う。実践に役立つ実のある研修をしていただきたい。 グループ活動の強化は個人の能力の向上につながる良い取り組みだと思う。その中で少人数でも中々自分の意見を反映することが難しい生徒をもっと支援する体制の構築を望む。 いよいよ来年から完全実施となる「道徳」の教科化に向けて、研修を重ねスムーズに移行できるようお願いしたい。授業改善アクションプランを全教員の共通理解のもと、授業力向上を図ったが、その効果に温度差が見られたことは今後の課題である。グループ活動の意義とその進め方等をしっかり生徒たちに指導することが大事である。 今年も公開授業を各々実施し、互いに切磋琢磨して授業力向上を図っている姿勢は必ずや生徒たちの学力向上に表れてくると思うので今後も続けて頑張ってほしい。	B	今年度は、全教員が授業を公開し、互いに「授業改善の柱」を大切にした授業へ向けて学び合うことができた。グループの中でも、自分の意見が言えない生徒については、ワークシートで事前に意見をまとめる場面の設定や「話し合いの基本型」の活用、支援員やT2との連携などの工夫をし、少しずつでも発言ができるようにしていきたい。その上で、質問や意見が交わせるように「話し合いの基本型」などを使い生徒を支援していきたい。 また、道徳については、生徒の道徳性を育むために有効な評価ができるように日々の実践から準備をしていきたい。さらに「考え、議論する道徳」へ向けて授業改善をすすめるため、校内研修を実施し、互いに研修を深めたい。

評価項目	領域	中期目標	短期目標	取組・成果指標	評価基準		自己評価 達成状況	評価	学校関係者評価 考察	評価	改善策
⑧保護者、地域住民等との連携	情報公開の推進	学校教育の内容や計画を広く情報発信する。	学校だより、学級通信等を定期的に発行し、ホームページの更新を適宜行う。	年間計画に沿って、学校だより、ホームページ等で定期的に情報を提供する。ホームページについては、載せる内容について教職員から意見をもらい充実させていく。また、メール配信システムを緊急連絡だけでなく、諸活動の案内としても有効に利用する。	A	学校だより、学級通信、HP等による有益な情報を定期的に発信	今年度も、毎月1回の学校だより、月の行事予定表を定期的に更新することができた。その他、部活動の結果報告（市大会、県大会、中国大会）、玉江大会等についても発信することができた。また、校内弁論大会、各種コンクールの結果についても、教職員の意見を聞きながら発信した。しかしながら、地域社会と連携して生徒を育てることに有益な情報発信ができたかと考えると、来年度に向けての反省として挙げられる。地域との連携で取り組んでいる活動を取り上げていくことを検討し、来年度のホームページを改善していきたい。 メール配信システムについては、緊急時以外（部活動、参観日など）にも利用することができた。有効な連絡方法だが、一部の教職員が使用方法をしっているのが現状である。全職員が使えることで、さらに有効な連絡方法になるので、年度初めに周知しておくことが来年度への課題である。	B	毎月の学校だよりでは校長の思いがよく分かるのでぜひ続けていただきたい。学校からの案内を生徒を通して家庭に配布する大切さを検討していただきたい。(メール配信に頼りすぎは良くない) ホームページの更新も定期的に出来ており色々な情報を早期に得ることが出来た。 ただ、情報公開の点でいうと、地域への情報発信はまだまだ出来ていないのが現状であるし中学校が地域にはあまり見えない。各種行事や参観日などの日に、コミュニティ組織や自治会等を通して、地域の方に気軽に学校に来てもらえるような方策も考えてはどうか。メール配信システムは緊急時に最も役立つツールと考える。全教職員がスキルを身に付けておくことがいざという時のためにも大切である。	B	来年度も、学校だより、行事予定については、月に1度の更新を行っていく。また、参観日、学校公開日等の情報をアップし、地域の方が学校に来ていただく環境を整備していく。 メール配信については、年度初めに周知し、教職員全員が扱えることを徹底していく。また、配布物をきちんと保護者に渡す重要性を指導し、メール配信を併用することで確実に連絡することができるので、そのことも含めて活用の仕方を検討していきたい。
					B	学校だより、学級通信、HPを定期的に発行・更新					
					C	学校だより、学級通信を定期的に発行、HPは時々更新					
					D	学校だより、学級通信を定期的に発行、HPは更新できず					
	学校間の円滑な連携・連動の推進	異校種間の連携・連動を図り、生徒の人間力の向上を目指す。	幼小中高の連携・連動を密にして、学校間の円滑な連携に努める。	幼小中高との交流・情報交換会、授業公開を積極的に行う。また、異校種間の共通課題の克服のため保護者への啓発活動をより進める。	A	幼小中高の計画的な交流により連携が充実	小学校との交流については、従来年度末に新入生の授業参観と情報交換を行っていたが、小学校からの要望もあり、本年度は出前授業と情報交換に変更をし、積極的な交流を行った。また、お互い公開授業の案内を出して教職員間の交流の機会を図ったが、見る機会はほとんどなかった。例年続いている江津中校区全体で行っている江津中のテスト期間に合わせたノーメディア週間の実施や、「ネット利用の家庭内の約束」づくりは連携して取組んだ。PTA総会や地区懇談会、情報モラル講演会等で啓発を行ったが、生徒指導部が行うアンケート結果によると、昨年に引き続き形骸化しているところもある。生徒指導部と連携して更なる啓発活動を進めたい。 高校との連携では、運動部の交流を引き続いて行った。幼稚園とは、職場体験や保育実習等で充実した交流ができた。 生徒指導面の連携では、生徒指導主事、主任同士の学校警察連絡協議会での情報交換や、月例の教頭会等で情報や指導事項の共有に努めた。	B	テスト期間に合わせたノーメディア週間の幼小中連携での取り組みは、家庭の理解も進み定着しつつある。今後も引き続き行ってほしい。 ネット利用に関しては低年齢化が急速に進み、小学校でもトラブルが起きていると聞く。下級学校との連携を密にして保護者への啓発も含め、決められた約束を再度厳守するよう厳しい指導をお願いする。	B	ノーメディア週間は、定着しつつあるので、実際にどれくらいきちんと守られているのかアンケート結果を引き続き公開して、形骸化したものにならないように小学校とも連携をして続けていきたい。また、PTA総会等でもしっかりとPRをしたり、PTAの専門部会でも議題に入れるなどして家庭と連携した取り組みにしていく。 ネット利用については、徐々にスマホの所有率が高くなっており、危機的状況にある。保護者の管理のもと正しい使い方ができるように、生徒対象と別に保護者対象の講演会を計画し、啓発活動を進めていく必要があると考えている。
					B	幼小中高の計画的な交流を積極的に実施					
					C	幼小中高の交流を実施					
					D	幼小中高の計画的な交流が不十分					